

# 趣味探訪

## 陶器

オーテス・ケリー

(大学文学部教授)

——ケリー先生はいろいろご趣味をおもちで、とくに陶器に関心をもたれていると伺っておりますが……。

ケリー 私、がらくたが、とくに流木とか木面が好きで、擦れて擦れて磨かれてくるような、そういうのが好きなんです。これは「わび」とか「さび」とかいうことばで言えない、そのちょっと落第したところくらいでね。そういうものが好きなんだ。ですから、そのセンスをまた陶器のほうにもってくと、だいたい民芸式なものがそれになってくるんじゃないかと思うんです。陶器は私も家内のほう、それから子供らにもその病気がうつったのか、最近わりにやりますね。——先生ご自身は、実際におつくりになるほうは……。

ケリー ぼくは見るだけ。——そういうものに関心をもたれるようになったきっかけは……。

ケリー 私、戦後進駐軍で来ていて、進駐軍終わって半年おったんです。そこでちょうど私が扱っていた真珠湾での日本の捕虜の一人が、式場隆三郎さんの妹さんが奥さんだったんだ。式場隆三郎という人は民芸の立て柱の一人だった。その式場さんの所へ、戦争直後、義弟さんが大丈夫だということを行って行ったんです。そこで友だちになっちゃってまもないうちに益子につれていってもらった。浜田庄司さんのところへ……。

——益子焼ですね。  
ケリー 浜田さんのところではひじょうに喜こんじゃってね。そこでそういう素朴な味

のものを直接紹介されたわけなんです。式場さんの家も、あのころとしては、和洋折衷というよりも民芸スタイルにできていた家だったな。まあそういうのを見たりしてね。

東京に「たくみ」という店があって、そこで式場さんとよく出会ったりしてね。あのころ物を運ぶのはたいへんだったけれども、あのころでもやはり民芸式のものをご自分で売っていたわけですね。

——そうすると、先生は陶器に目がふれ、その美しさというものにひかれて、自分も実際に集めてみようという気持ちになって始められたということですね。

ケリー そういうことです。おもしろい話があるんですよ。こんど同志社に来るから女房を益子にいっぺんつれて行ってやろうというところで友人のジープを借りて行ったんです。

それで浜田さんのところを訪ねたんですよ。そしたらまた歓迎してくれて、二、三時間居って帰るというときに、何か持って行ってくれませんか、はしごを登って屋根裏へ上がりなさいというんですよ。たくさん置いて

たということも、興味をもたれるきっかけになってくるでしょうね。

ケリー そうですね、ほんとに。

——お集めになっている陶器の数は？  
ケリー そうたくさんありませんよ。民芸の精神が知らないけれども、実際に使うものなんですからね。たくさん飾っておくとか、なんとかという趣味じゃないんです。

これはほんとうにきれいだと思ったら、買ってくるかもわからないし……。

——先生のご専攻は米国の文化史で、ご趣味はそれとご正反対のような印象を受けますが……。

ケリー でもね、ニューイングランドとなると、アメリカでいちばん古いところですけども、そういう民芸式のものがたくさんあるんです。家具とか食器類とか、いろんなそういうものがあるんですよ。

アメリカの場合は、民芸というよりもアンティーク (antique) といっているけれどね。一つの芸というところまで行ってない。

——先生の場合、陶器についてのご趣味の楽しさというのは、どのあたりにあるんでしょうか。

ケリー 他人の人が見てくれて、こっちから

言わなくても、それに気がついて、同じ感じになってくれると、うれいところですね。

こっちが何も言わなくても、むこうが、これはいい、というふうに言ってくれれば、この人間は信頼できる人間だなというふうになってくるんだ。

ああいう民芸式のものにはひじょうに純粋なんだな。つまりゴテゴテして、いろんな細かい術を見せているというものじゃないんだね。色そのものでもそうだし、それから実用的というところがまる出しなんだね。

——これからの趣味についてなにかお考えになっていませんか……。

ケリー いつも思っている暇がなくてだめなんだけれども、メートル法にかわったでしょう。だから、田舎の米屋さんなんかに行くと、古い枡がだいぶ余っているんじゃないかと思うんだけど。思うんだけど、田舎の道を走っているときは、そういうものがなくてね。

——そういうものを求めていくということもまた楽しいことでしょうか。  
どうもありがとうございました。



オーテス・ケリー氏